

# 「ナラ枯れ」研修会

◎平成22年8月21日 京都御苑で樹木医の中川講師ご指導による「ナラ枯れ」の研修会を実施しました。

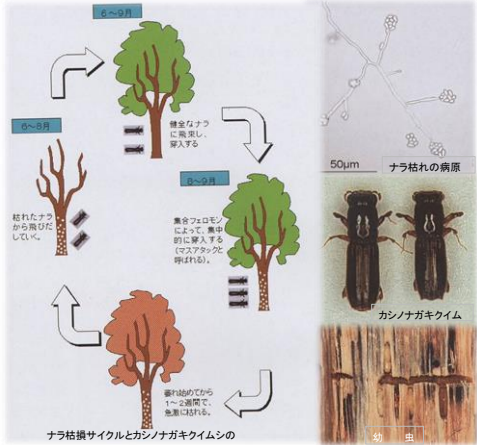


▲研修会参加者

▲中川講師から「ナラ枯れ」の実態・対処策等の説明を聴きながらの体験学習。

「ナラ枯れ」はカビの一種である病原菌(Raffaelea q uercivora)による伝染病で、「カシノナガキクイムシ」が媒介しナラ等の広葉樹が次々と立ち枯れる被害が全国的に拡大しています。京都では昨年の5倍の2万本もの被害が出ています。生活の変化で薪の需要が減り、ナラ等広葉樹が古木となって抵抗力が弱まる等が背景にあり、現在確実な治療法は見当たらないが古木にならないように早く除伐して森を若返らせることが大切です。

出典：独立行政法人森林総合研究所関西支所発行「里山に入る前に考えること」「ナラ枯れの被害をどう減らすか」



## ナラ枯れ「紅葉」酷暑の悲鳴

### 京都で昨年の5倍2万本 背景に手入れ不足

全国各地で「ナラ枯れ」が猛威を振るっている。夏場に侵襲されたナラなどの広葉樹が次々と立ち枯れ... (Main article text)

年	被害本数(千本)
1999	20
2000	30
2001	40
2002	50
2003	60
2004	70
2005	80
2006	90
2007	100
2008	110
2009	120
2022	3000
2023	15000

▲ナラ枯れ 体長数cmの甲虫(カシノナガキクイムシ)の幼虫が夏場に、ミズウチやコナラなどの幹に穴を開けて弱酸性のカビを持ち込み、水を運ぶ薄皮を詰まらせ、多くの木々を枯れさせる現象。大木を好み、枯れた木のワラで繁殖し、別の木に移る。

## 生駒市 イモ山公園樹林(白庭台) ドングリ公園樹林(真弓南) ナラ枯れの実態

平成26年、当会活動エリア内のコナラの樹皮に多数の穿入孔(直径2mm弱)が確認され、樹木の地際に穿孔によるフラス(木屑)が堆積しているのが見つかった。カシノナガキクイムシの特徴：メスは前胸背に孢子貯蔵器官を持っていて、病原菌を運搬し菌を樹幹の中で繁殖させて幼虫の食料にする。酵母類やナラ菌等の菌と共生している。6月~7月に成虫は枯れたナラから飛び出し、6月から10月にかけて健全なナラに飛来し、穿入する。飞翔時間帯は早朝、夜明け後から約2時間までの間である。

現在、樹林内の被害樹木には成虫の飛び出し防止の目的で透明フィルムが巻かれ、内側を薬品で薫条し、拡散防止の取組みがなされている。また、健全な木への穿入を防止するため、成虫の捕獲トラップなどの防止対策を試みている。



被害状況：木の根元周りに穿孔による木屑が堆積している。生駒市内の森に被害が広がっている。

※捕獲トラップ：ペットボトルを利用した簡易捕虫器